

第32期第1回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 令和7年2月4日（火）10時00分～12時00分
仙台市役所本庁舎 8階 第5委員会室
- ◎ 出席委員の氏名 狩野富士子委員、木村ひろみ委員、小林直之委員、
齋藤千里委員、佐々木祐二委員、佐藤孝子委員、
佐藤幸雄委員、竹内透史委員、渡辺祥子委員、
渡邊千恵子委員、渡辺ゆき委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 樋口千恵、市民図書館副館長 伊勢貴
広瀬図書館長 菊池雅人、宮城野図書館長 岩淵明広
榴岡図書館長 柴田雅子、若林図書館長 村上佳子
太白図書館長 湯村倫子、泉図書館長 那須野昌之
市民図書館企画運営係長 宍戸信宏
市民図書館奉仕整理係長 吾妻由美
市民図書館奉仕整理係主査 浅野佑一

◎ 会議の概要

1 開 会

2 教育長挨拶

3 委員自己紹介

4 事務局紹介

5 会長・副会長選出

会長に渡邊千恵子委員、副会長に児玉忠委員が推薦され、承認

6 会長挨拶

7 議長選出

会長を議長に選出

8 会議録署名委員指名

会長より狩野富士子委員を指名

9 報告事項

(1) 令和6年度の事業成果について

資料1に基づき報告

[委員からの質問・意見等]

議 長 改めて報告を伺うと、図書館の特性上なのか、実に多様な関係部署と連携していることがわかる。

狩野富士子委員 太白図書館の「りんごの棚」について、ほかに設置している図書館はあるか。

事務局 本市図書館の中では、現状ではない。

議 長 「りんごの棚」というネーミングと趣旨に沿った取組みは、仙台市では太白図書館が初めてということで、今後、全市的に共有していくのか。

館 長 読書バリアフリーに関する取組みは、どの館でも行っている。今年度、先駆的に太白図書館が「りんごの棚」という名称で、このような取組みをした。やはり分かりやすい見せ方も必要だろうと考えている。

また、前期からの委員はご承知のとおりと思うが、令和8年度からの「今後の図書館のあり方」の実現に向けた取組みとして実施した意義もあるものと捉えている。人生100年時代を見据えた読書バリアフリーや、誰もが使いやすい図書館となるための取組みの中で、太白図書館と市民図書館が共に主導的な立場で役割を担っていくことを見据え、太白図書館が先鞭をつけたことは、本市図書館としては良い取組みであったと考えている。全館でどのように展開していくかは、今後、各館の状況も踏まえ考えたい。

狩野富士子委員 承知した。

議 長 太白図書館での取組みの検証は必要だと思う。

事務局 承知した。

竹内透史委員 補足だが、「りんごプロジェクト」というものは全国的に展開されており、昨年度、宮城県図書館もこのプロジェクトで中心的に活動している方を講師に招き、図書館職員向けの研修会を実施したところだ。宮城県図書館でも設置について現在計画中であり、近い将来設置することになると思う。このプロジェクトのポイントは障害者向けということだけではなく、いろいろなところに棚を設置し、障害のない方にも取組みについて知ってもらうことを目的としている点である。学校図書館の中に作ることも可能で、例えば、識字的な学習障害がある子どもたちが、「りんごの棚」の設置により、自分たちにも読める本があることに気づいたりするためには、公共図書館より学校図書館にあったほうが、はるかに効率的だろう。そういったことも含め、進められているプロジェクトである。必要であれば、宮城県図書館で研修講師の紹介等もできると思うので、お声がけいただき、普及していければと思う。

議 長 全国的な取組みになっているようなので、調べてみたいと思う。

佐藤幸雄委員 今年度の児童文学者講演会は、大変すばらしい内容で、会場もいっぱいだったと記憶している。来年度は、どのような形で進めていくのか、講演される方が決まっているのか、現時点で話せる内容があれば教えてほしい。

館 長 来年度の講演会の講師を含め、内容や対象については、まだ検討中である。毎年度、同様の内容や対象で行っている講演会ではない。ただ、子どもの読書活動に資する講演

会というところは一貫している。来年度については検討中だが、今年度の児童文学者講演会は、中学生、高校生が企画段階から加わったことで、非常に活気づき、職員としてもパワーをもらった。これほどすばらしいものが相互作用で、できあがるのだと実感した。ぜひ来年度以降もこの経験を生かした講演会にしていきたい。

議 長 私もその講演会に参加した。実行委員の子どもたちに声をかけたら、「また来年も参加したい」と力強い言葉が返ってきたので、その方向性でよろしくお願ひしたい。

せっかく、楽しくて、やりたくて、また来年もチャレンジしたいという気持ちになってくれた子どもたちも多いようなので、実施方法を変えて梯子を外すような感じにはしないほうが良いと思う。

木村ひろみ委員 中高生の実行委員や図書館での大学生のボランティアの活動について、学校以外で自分たちの意見や考えを伝える場があるのはいいことだと思う。

太白図書館のビブリオバトルとはどういうものか。

事務局 何人かのバトラー（発表者）が順番に自分のおすすめの本の魅力を話し、発表後、ディスカッションを行う。すべての発表後、オーディエンス（観客）は、一番読みたくなった本に投票し、多数決でチャンプ本を決めていくものだ。図書館だけでなく、一般的に行われている本を用いたイベント、ゲームの一つである。

木村ひろみ委員 承知した。

議 長 一般的には、随分前からビブリオバトルは開催されているようだ。事前準備が大変で、誰もが参加できる感じでもないと思うが、根強く様々なところで行われている。河北新報には、このビブリオバトル以外にも、中学校か高校で本の紹介のPOP作りをしているという記事もあったと思う。

佐藤孝子委員 仙台市民図書館の赤ちゃん絵本のふれあい事業についてだが、一番小さい子どもだと、どれぐらいのお子さんが参加しているのか。またこの事業は、ブックスタート事業を意識して実施しているのか。

事務局 0歳児から対象としているが、それだけでなく、これから赤ちゃんを育てていくマタニティの方々も対象としている。低い月齢から本に親しめるように、また、保護者と子どもがスムーズに読書活動を進められるようにと、趣旨はブックスタートと同様ではあるが、絵本のプレゼントは行っていない。事業内容としては、ブックスタートだけを意識したものではない。

佐藤孝子委員 栄養士による栄養食事相談との連携事業がとてもいいと思う。ほかの事業の担当者が一緒に入ってやっているのか。

事務局 栄養士3名に来ていただき、本とは関係なく、育児や食事に関する相談を受けている。相談コーナーのそばで絵本を展示したり、読み聞かせをしている姿を見てもらったりする中で、絵本にも興味を持ち、小さいときから絵本に触れ合う生活に円滑に進んでいただけのように、このスタイルにしている。

佐藤孝子委員 保護者が子どもを連れてきて、絵本だけではなく、様々なことができる場所があるのは、とてもすばらしい。

渡辺祥子委員 様々な事業との連携を充実させていることは、本当にすばらしい。その中で、広瀬図

書館の地域包括支援センターとの連携は、なるほどと思った。まさに文字どおり、地域を包括して支援している機関としっかり連携をしていく。今回は認知症カフェであったが、いろいろと見えてくるものがあると思う。

しかし、同じことが市民図書館でできるかという点、地域包括支援センターはたくさんあるので難しいのかもしれないが、広瀬図書館の取組みで見えてきた良い効果を様々な図書館で取り入れていくのもいい。

また、これを全図書館でやっていくのは難しいので、ボランティアの方々と連携することも考えられるかもしれない。あかちゃんくらぶや乳幼児健診にピンポイントで図書館がかかわっていくことは、とてもいい取組みだ。

議 長 図書館にはいろいろなジャンルの本があり、いろいろな事業とマッチすることが多い。こちらからどんどんアプローチしていったら、図書館にも足を運んでいただけるような形にできると良いと思う。

佐々木祐二委員 本当に時代にマッチしたというか、多様性を重視した活動などもあり、他の事業との連携は本当に素晴らしい。そして利用者数の人数も書かれていて、それぞれの館の独自性も見えて、素晴らしい取組みだ。

私からは2点ある。報告事項からずれてしまうが、来週、小学校の学校図書館部会の全体会があるので、今日のお話を参考に先生方にも伝えたいと思っている。今、学校は予算がないので新しい本は買えない状況だ。本が好きなお子も読みたい本がないという感じになっている。本は値段が高くなっているが、予算はそれほど増えていないので買える冊数は少なくなっている。人気の本はなかなか買えない状況なので、そういう子どもたちには「近くの図書館に行ったらいいよ」と話している。私が勤務する小学校もそれほど図書館に近くはないが、それでも図書館に行っている子は行っている。新型コロナがあって、子どもたちが施設に行くのを一旦ストップしてから、前のように行っていないのかなと感じる。子どもたちの図書館利用状況を教えてほしい。

また、学校連携事業について、公共図書館から配送便で各学校に貸出しをしてもらっている。とても助かっているが、若い先生方が多く、学校図書館部会の先生方も利用の仕方がよく分かっていないと感じる。図書貸出サービスの利用状況も教えてほしい。

事 務 局 広瀬図書館の主な利用者は高齢者と子連れの若い夫婦である。小学生は全図書館が行っている4年生対象のブックトーク、2年生の利用が多い施設見学の公共図書館利用学習があり、4年生と2年生は概ね全図書館にかかわっている。その時、いかに図書館をPRできるかについては常に意識していて、興味を引く話は必ずしている。それをきっかけに小学生が図書館に来館する姿も実際に見られる。

事 務 局 宮城野図書館でも同様に、小学4年生のブックトーク、2年生の公共図書館利用学習がある。2年生の児童が来たとき必ず挨拶をするが、まず一番初めに「宮城野図書館に来たことがある人」と聞き、手をあげてもらう。次に「本を借りたことがある人」と聞くと、結構、手があがる。思っている以上に来館してくれていて、低学年のほうが多い印象だ。宮城野図書館は児童館が併設されており、児童館の子どもたちも各種イベントに参加してくれるので、土日にはにぎやかだ。先日実施した紙芝居のリレーでは、読み手

にチャレンジした子もいた。

また、授業用貸出しは、昨年度に比べてかなり増えたと職員から報告を受けている。

事務局 (榴岡図書館長) 公共図書館利用学習、ブックトークは他館と同様の状況である。近隣小学校の職場体験の「弟子入り留学」などもあり、小学生と対面することは多い。「今日も来ました」と児童の皆さんが声をかけてくれる。新型コロナ前に比べると小学生の来館は非常に増えている印象だ。

事務局 (若林図書館長) 2月1日(土)にリニューアルオープンした。学校でのブックトークや公共図書館利用学習は他館と共通である。若林図書館は、子どもたちだけで来るのは近くの子に限られる。未就学児や小学生は館内を見るとたくさんいるようだが、やはり近所の子どもや保護者と車で来館した子どもたちである印象だ。

事務局 (太白図書館長) 太白図書館は、周囲にマンションが多く、土日を中心にたくさんの方が来館している。小学生は父母や兄弟姉妹と一緒に家族で来館している様子が見られる。また、子どもたち同士で宿題をしている姿も見られ、いつも席はいっぱいだ。通路をすれ違って歩くのが難しいくらい混んでいることもあり、本当に子どもはたくさん来ている。

事務局 (泉図書館長) 泉図書館では、小学生利用者の延べ人数は新型コロナ前に戻っている感はある。延べ人数なので、数字が増えても利用する小学生、あまり利用しない小学生に二分されていると思っている。泉図書館の立地はいいが、市内には施設型図書館のサービスが届きにくい地域もある。そこは移動図書館がカバーしており、学校とのかかわりでは、小学生の学びのために図書館が出向いていく「移動図書館学習会」という取組みも実施している。移動図書館車の利用体験などを通じて、児童には「図書館って楽しいところだよ、本って楽しいものだよ、読書って面白いものだよ」と感じてもらえたらと考えている。

事務局 (市民図書館主査) 市民図書館も含め各図書館共通するが、学校の長期休業期間は小学生がたくさん来館してにぎわっている。年齢にもよるが、平日は子ども一人での来館は難しい状況が見受けられる。公共図書館利用学習は小学2年生が来館することが多いが、その後の土日に、来館してくれた子どもが手を振ってくれることもありうれしく思う。ブックトークは全ての仙台市立小学校の4年生を対象に実施している。ブックトークを聞いて来館してくれるケースもみられるので、継続して事業に取組みたい。

また、学校連携事業の授業用図書貸出サービスでは、学校から「このテーマで何十冊本を貸してください」と依頼が来るので、教科書に沿った形で図書館職員が選書し、配送サービスを利用して学校に図書を送っている。例えば、小学1年生の乗り物についての学習で、「乗り物の紹介カードを作ろう」という言語活動を行う場合、各学校から同時期に依頼が集中し、仙台市図書館にある乗り物の本が一気に学校へ貸し出されていくといったことがよく起きる。貸出回数は順調に伸びているが、学校連携事業のことを知らない若い先生方が増えているという話があったので、広報のあり方も検討していきたい。

佐々木祐二委員 状況は承知した。来週、さらにPRしたいと思う。

(2) 「仙台市の図書館に関するアンケート調査」実施報告について

資料 2-1, 2-2 に基づき報告

[委員からの質問・意見等]

議 長 今回の報告書は、さらに分析した形で図書館振興計画の中間見直しに反映していくということか。

事務局 そのとおりである。

議 長 自由記述が多く、内容としては要望が多いと思うが、皆さま方にも目を通していただきたい。

小林直之委員 この2つのアンケートを大変興味深く拝見した。本当に面白い結果が得られたと思う。一番ショッキングだったのは資料 2-1 の問 16 と資料 2-2 の問 11 だ。「期待する図書館のイメージについて、お選びください」という質問に対し、昨今、全国の公共図書館が目指している、「地域のにぎわい拠点として交流や活動をする場」の回答数が少ない。市政モニターも、図書館を利用している方でも、この部分の期待は小さいという結果をどう受け止めたらいいか。これは今後の図書館の運営のことも考えなければならぬと思った。アンケート結果をどう判断するのかということでもあるので、単純に結論めいたことは言えないが、ほかに比べると期待は小さいと認識しなくてはならないと思う。一方で、資料 2-1 の問 16 「1. 必要な情報を入手し、資料を利用できる場」、資料 2-2 の問 11 「3. 読書を楽しむ暮らしを支える場」など、こちらの期待が大きい結果がでたことは率直に受け止めなければならない。

また、資料 2-2 の問 15 の自由記述については、大変多様な意見をいただいた。全ての要望についてバランスよく対応するのは非常に難しいと思うが、厳しい意見が少しでも減り、温かい意見が少しでも増えるように、図書館協議会の議論、あるいは図書館の運営も考えていかなければいけない。20 ページには協議会に対する意見も 3 つぐらいあり、協議会に非常に強い関心を持っていただいていることについて、委員の一人として真摯に受け止めたい。私は義務的に参加しているつもりは全くなく、協議会は委員の方々の様々な意見を伺いながら良い議論ができる場であるので、今後もそのことが利用者の皆さまにも伝わるようにしたい。

議 長 私は、この「地域のにぎわい拠点として交流や活動する場」に関しては、多分回答者の皆さんは、イメージができていないのだと思う。だから何となくイメージできるもので、これはあるべきだな、あったほうがいいなというものを選択していると思う。多くの方は、図書館でにぎわいというイメージがない。これから、こういう取組みが増えて、「そういうことか」と分かってくれば、伸びると前向きに捉えている。

小林直之委員 私も前向きに捉えたいと思う。まだその面白さに気づいていない方がたくさんいると考えたい。

齋藤千里委員 私も、市政モニターの方と実際に図書館を利用している方の図書館に対するイメージがこれほど違うことにまず驚いた。あまり利用していない方の図書館の捉え方と、利用している方の捉え方に違いがあるのは当然だと思う。私自身は割とヘビーユーザーなので、利用している方の結果に共感するが、あまり利用していない方に図書館はこう見え

ているのかとわかり、新しい気づきを得た。

私たちの年代だと図書館はとにかく静かにしなければならない場所というイメージがある。しかしこのアンケート調査によれば、おそらく小さな子どもがいる方からだと思うが、自由におしゃべりできる場所が欲しいという要望があり、求められている図書館の姿は私が思うものと変わってきていることに衝撃を受けた。今の図書館は本を探して読むということだけではなく、親子の触れ合いの場所であるとか、交流ができるような場所としての役割も求められている。自由記述を読んで様々な考えがあるのだとわかった。これからは多様性の時代なので、様々なことを考えながら図書館を運営していかなければならないと感じた。

議 長 様々な意見があったが、どんな方向性に持っていくかは、協議会で真剣に協議していきたい。

10 協議事項

(1) 令和7年度仙台市図書館運営方針・事業計画策定に向けた「重点的な取組み」案について

(市民図書館副館長 説明)

資料3に基づき報告

[委員からの質問・意見等]

議 長 前期からの委員の方は、令和6年度の重点課題、そしてそれがどのように実施されたかというのを見たうえで、令和7年度の案が出てきているということが分かると思うが、この令和7年度の「重点的な取組み」の案について、質問、意見はあるか。

これは、次回の協議会で決定事項となるか。

事務局 今回、「重点的な取組み」の案をご承認いただいたうえで、事務局で令和7年度の図書館運営方針・事業計画を策定し、次回の協議会で報告させていただく。

議 長 承知した。ここ何期かにわたり、小学生、中学生、高校生の世代が非常に重要であり、この世代に向けた取組みを重点的に実施することについて長く話し合われてきた。

先日、川島先生の講演の記録を見たが、デジタルではなく、実物の本を読むということが大事であるとあった。YA世代が大人になって、親になったときのことも視野に入れて、(2)については、「YA世代」の記載があるのだと思う。

狩野富士子委員 (2)に関して、「YA世代」の文言が入ったことは、とても大事なことだ。早くに本に出会うという価値と、それを生涯にわたって享受すると考えたときに、小学生は学校図書館を利用する率が高いが、中学生になった途端、部活動などで図書館へつなぐことが大変難しくなる。学校の体制としても、当たり前のように朝の10分間、朝読書を設定している学校がほとんどであったが、最近、それが朝学習に変わる流れが現実としてある。これらを考えると、やはり目に見える文言で「YA世代を対象」と示していただくと、学校もそれを受けて、何ができるかということにつなげやすいと思う。この時代の読書体験が、大人になったとき、何かあったときに、本を読んで救われたり、本に立ち返ったりすることにつながるのだろう。そのためにも、早くに本と出会い読書体験をする子にしたいと思う。実物の本を手にとって、指先でページを次、次とめくっていく、

その動作の時間を持つ価値を非常に強く感じている。学校では朝学習の時間にしたほうが良いという意見があるが、やはり朝読書にしよう、先生方も本を読もう、本を読む姿を子どもたちに見せようと話している。そうしていかないと本を手にとることにつながらない。この(2)に「YA世代」の文言が入り、非常にありがたいと思っている。

木村ひろみ委員 小学校のさわやか相談員として2校で勤務している。学校図書館での子どもたちの本の扱い方がとても気になっている。学校図書館の担当の方に聞くと、破れてしまった本を直すことが多いそうだ。子どもたちが本を読んでいる姿を見ると、めくり方に違和感を覚える。折り目がついてしまうようなめくり方をしている。本の扱いは家庭で教えることかもしれないが、自分の物ではない物の扱い方を勉強してほしいと思う。図書館に行つて、いろいろな本を借りてほしいが、その扱い方についても併せて図書館で教えていただけるとありがたい。

議 長 昔と違い家庭も多様になってきているので、家に本がない家庭もたくさんある。学校図書館や公共図書館のそれぞれの役割は大きく、本の扱い方一つにしても、それぞれの図書館の担当の方が本を大事に扱っている姿を子どもたちに見せるなど、そういうつながりの中で学んでいくのだろう。

木村ひろみ委員 そういうことを勉強することも必要だと思うことが多い。

議 長 今まで、とくに教えられることではなくても、借りた物は丁寧に扱うのが当たり前だったが、図書館職員にも本を丁寧に扱うお手本や模範になるようなことに配慮してもらうことも必要なかもしれない。

渡辺ゆき委員 新聞社でも学校に授業に行く機会が増えている。本と新聞に共通しているかもしれないと感じるのが、新聞を読んでみようと言ってみても、まず読み方が分からない。気になった記事を切ってみようと言ってみても、記事のひとかたまりがどこまで分からない子どもがいることだ。本も同じで、本が身近にないと、例えば表紙を見て、めくり、目次を見て、めくって読んでいく、その当たり前だったことがおそらく分からないのかもしれない。学習ももちろん大事だが、朝読書のように本に触れる時間を本の入口のようにして、学ぶべき世界があることを知ってもらい、自分を守る力をつけてほしい。既にもうそのゲートがなくなってしまっている感じが見てとれるので、実際に手に取つてめくって読むという機会がとても大事なだろう。

また、(4)の「図書館資源の活用」とは、具体的には何を指しているのか。

事務局 図書館の有する資源全体を指している。例えば、施設、蔵書や、事業など図書館を活用してできるもの、図書館をベースにして成り立つ全てを含んでいる。

渡辺ゆき委員 質問したのは、先程のアンケート調査結果の資料2-1と資料2-2の差が大きいことが気になったからだ。資料2-1の市政モニターの結果が資料2-2の図書館利用者の結果に少しでも近づくほうが良いと思う要素がいろいろあると思った。

近年は猛暑で、命にかかわる災害級の暑さをこの何年か経験しているが、夏場の避難場所を公共空間につくる動きが全国で起きている。図書館におけるアプローチの一つとして、立ち寄りやすさを生かし、夏場の避難場所として活用してもらいたいと思う。資源を活用するという意味では図書館は居心地がよく、誰でも居られる場所でもあるの

で、いろいろな視点で活用していただきたいと思う。

事務局 図書館は地域の拠点でもあるので、そういったところも取り組んでいければと思う。
議長 子どもたちが本を雑に扱うのは、扱い方が分からないだけなので、身近な大人たちがどうかかわっていくかが大切だと思う。

竹内透史委員 4つの方向性については、「YA」が入ったことも含めて良いと思う。この後、細かなものが決まっていくと思う。関係ない話になるかもしれないが、1月に東北福祉大学の中林先生を講師にお招きして、図書館職員向けの研修会を行った。研修は図書館が発達していない世界の図書館を見て、日本の図書館を考えましょうという内容であった。

受講者からは、「日本の図書館は恵まれていますね」という感想が多かったが、私は全くそう思わなかった。

ネパールでは、学校図書館も公共図書館も全くないが、スマートフォンは普及しているようだ。スマートフォンが先に普及した環境で、図書館は必要とされるのだろうかと考えると、私は図書館の将来に関して、非常に悲観的な気持ちになった。

これは方向性4にかかわってくるが、「専門性の向上」の専門性とは利用者のいろいろな要望に応えられる資質のみならず、そもそも図書館とは何なのかという問いの中にある「何」こそが、何よりの専門性なのだろうと強く感じている。アンケートにも、「資料保存が第一の目的だからサービスは縮小すべき…」という意見もあったと思うが、私はそれは暴論ではなく、全く本質的な意見だと思う面もある。これらを踏まえて、宮城県図書館の役割でもあるが、職員全員に「専門性」や「そもそも図書館とは何か」について考える機会をつくるのが大事だと感じた。それにより、その個別の施策、方策がさらにいいものになっていくと思う。

議長 図書館のあり方というのは、変わらない部分と、社会が変わってくることによって変わっていく部分と、両方がある。限られた資源の中でそのバランスを取っていくことが大事であると思った。

齋藤千里委員 スマートフォンが先に普及した環境において、図書館が必要なのかについて、乳幼児に関していうと、現に子どもたちは本より先にスマートフォンを触る環境にあるので、本をめくることはできなくてもスマートフォンの操作はできるようになっている。0歳から本に親しむようにと、いろいろな形で図書館をはじめ各方面でも取り組みを行っているが、実際、スマートフォンで事足りてしまうことも多いだろう。スマートフォンがあれば、電子書籍を読むことができ、いろいろな動画を見ることができて楽しい。そういう環境の中で、やはり図書館が必要だと思ってもらえるやり方を考えていかなければならない。図書館が取り組んでいくことはもちろん大事だが、かかわっていく大人たちそれぞれが、様々な形で「本は楽しい」ということを0歳児から伝えていくことが必要だ。先ほどの教育長のお話のとおり、本を読むメリットはたくさんあって、私は読書が楽しいから今ボランティアをして子どもたちにその楽しさを紹介している。読まなければならないではなく、「楽しい」をキーワードにして取り組んでいかないと伝わらない。私たちはそういったことをベースに考える必要がある。

また、児童館に関していえば、本のめくりがうまくできない、乱雑だというのは日常

で、本当にあつという間にぼろぼろになる。本だけではなく物を大切にしないという風潮があると感じるので、大人がきちんと教えていかなければならないと思う。

佐々木祐二委員 「本を大切にする」ことは小学1年生の学級活動の中で指導する。家庭の問題など様々な事情があると思うが、来週の会合で、先生方に伝えたいと思う。

また、読書習慣については、小学生のうちに習慣づけさせなければ、多分、その上はないと思っているので、本気で取り組んでいるところだ。先ほども話したが、先生方が若くて、そういう知識や技術が足りないので、ボランティアの方々にかかわっていただいている。

以前、大学の先生に伺った話では、学生が本を読んでレポートを書いたり、論文を書いたりすることが、とても苦手になっているようだ。インターネットの情報だったり、AIが作ったものだったり、本から情報を得なくても、今やAIがレポートを作ってくれるし、そのレポートに対する感想もAIが作ってくれる。何も考えなくてもAIが代わりに全部やってくれる時代になってくると、図書館の役割はあるのかと思えてしまう。

私も先ほどから本の数などを気にしていたが、貸本屋と図書館の大きな違いというのは、図書館には、本を通じて何か困っていること、調べたいことの解決を手助けしてくれる、レファレンス業務があることだ。これは、明らかに貸本屋とは違う。(4)の「職員の資質の向上と専門性」というのはとても大事であるので、この点を打ち出すことと、(2)の「YA世代」についても大事に伝えていくことで、図書館の役割というのが果たせると思った。

議長 いろいろと意見が出たが、この令和7年度の「重点的な取組み」については、この内容でよろしいか。

各委員 異議なし。

11 その他

令和6年6月から休館していた若林図書館は2月1日から再開した。

次回協議会の案内

12 閉 会